

学位論文の要旨	
氏名	江山
学位論文題目	地域社会における戦争記憶の形成と継承 —鹿児島県の事例を中心に—
<p>本論文は、鹿児島県の事例を中心に、日本地域社会の第二次世界大戦に関する戦争記憶の形成過程を明らかにし、継承してきた戦争記憶の内容を明らかにすることを目的とする。本論文での検討を通じて、日本の戦争記憶研究に地域の視点を提示することを試み、構成は以下の通りである。</p> <p>序論では先行研究の整理と鹿児島県を事例として取り上げる理由の検討を行った上で、本論文の課題と分析方法を提示した。先行研究においては、戦争記憶は構成されたものとして扱われ、ナショナルレベルの戦争記憶を中心に検討されてきた。沖縄、広島、長崎の戦争記憶を中心とした研究はあるが、沖縄は唯一の地上戦の戦場であり、広島、長崎は原爆投下地でいずれも特殊性の強い地域である。しかし、日本全土は空襲を受けていることなど、数多くの地域に戦争記憶が存在する。これまでの沖縄、広島、長崎を中心とした研究では見えてこなかった地域社会の戦争記憶の姿を解明する必要がある。</p> <p>鹿児島県の事例を取り上げた理由は、鹿児島県は本土防衛作戦、沖縄戦との関連で最前線とされ、また、70年代から鹿児島県の各民間団体による戦争記憶の記録、継承運動が盛んになり、現在まで様々な活動を続けているからである。鹿児島県の事例を通じて地域社会の戦争記憶の形成過程を明らかにし、その特徴や問題点を論じ、継承されてきた戦争記憶の内実を解明するが、そのために、文字を媒体とした継承活動と文字化以外の継承活動、とくに文字以外の活動の中で戦争遺跡をめぐる戦争記憶の形成を取り上げた。さらに、地域における民間レベルの継承活動の特徴を明らかにするために、公的活動との相違を検討し、また他の地域（熊本県）との比較を行うことを通じて、鹿児島県の事例の特徴を明らかにした。「集合的記憶」は社会の中で形成される記憶を分析する際に有効であるため、本論文は主に集合的記憶の概念を用い、とくに人々はどのように集合的記憶を作り上げていったのかに着目した分析を行った。これらの分析を行うために、参与観察や継承活動を行う団体や個人へのインタビューで得られた記録、新聞資料、文献資料、記念碑などを活用した。</p>	

第1章は鹿児島県における空襲記憶の記録化、記憶の継承を取り上げた。各種の戦争記憶の中で、空襲に関する民間の取り組みが最も数が多く、一番早い段階でスタートし現在まで続けられているからである。各民間団体の文字化による記録と継承や文字化以外の記録と継承の目的や活動を分析し、空襲記憶は様々な活動を通じてどのように形成されてきたのかを明らかにした。さらに、空襲記憶継承の問題点を論じた。

第2章は海軍航空隊の拠点であった出水市や鹿屋市の戦争遺跡に関する継承活動を分析対象とし、戦跡の継承活動はどのように行われ、戦跡の記憶はどのように形成してきたのかを明らかにした。そして、戦争遺跡の保存活用の第一線で活動する平和学習案内人へのインタビューを通じて、彼らはどのような経緯でガイドを始め、どのような戦争記憶を継承していくのかを確認した。

第3章では戦争記憶に関する公的な継承活動がどのように行われ、その目的はなにかを検討した。第一章や第二章の民間の活動と対比するために、鹿児島市、出水市や鹿屋市の事例を取り上げ、公的な追悼式、史料館、写真展などを分析対象とする。その経緯や背景から公的な継承活動で形成される戦争記憶と民間で作り上げようとする戦争記憶との差異を検討した。

第4章は鹿児島県の事例と比較するため、熊本県の事例を取り上げ、熊本県の戦争記憶はどのように継承されてきたのかを論じた。ここで空襲に関する記録と継承活動、戦跡に関する記録と継承活動、熊本の地方メディアの役割や熊本県の公的な継承活動を分析し、熊本県における戦争記憶の継承の進め方を解明した。そして両県の空襲記憶や戦跡記憶の継承における共通点や差異を検討した。

終章では以上の分析を踏まえ、第一に、戦争記憶の継承が継承の目的によってどのように違うのかを整理した。第二に、鹿児島県での戦争記憶はいかに形成されたのかを分析し、鹿児島県における戦争記憶の形成と継承はどのような特徴を持っているのかを明らかにした。最後に、鹿児島県で継承されてきた戦争記憶の共通点とはなにかを提示した。